





論 文 審 査 の 要 旨	
学 位 申 請 者 氏 名	末岡 ツネ子
論 文 題 目	On the Concept of “Love” in <i>The Prelude</i> : A Stylistic Search for the Characteristics of Wordsworth’s Use of “Love”
論文審査担当名	主 査 中川 憲  審査委員 松岡博信  審査委員 高口圭轉  審査委員 町 博光 
論 文 要 旨	
<p>本論文はウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth (1770-1850)) の『序曲』における「愛」の概念とはいかなるものであるかを、文体論的研究から探ろうとするものである。</p> <p>Alexander Pope (1688-1744) をはじめ、知性と秩序を尊重した古典主義文学の反動として、新しい自然観の表現と、自由な人間感情の発露を基調としたロマン主義が誕生した。この文学運動の先駆者の一人がワーズワスである。本論文は、英国の湖水地方に生まれたワーズワスの自叙伝的大作『序曲』1805年版、13巻、8487行からなる長編詩を主な題材とした。この大作は、イギリスの北部、湖水地方で生まれ育った少年の、青年時代に挫折や失望を味わいながらも、再び自然と交わることにより、苦悩から回復した壮年時代に至るまでの魂の成長を跡付けている。添田透氏は次のように述べている。「彼以前の偉大な詩人と、詩の4大テーマである愛、死、神、自然との結びつきを考えれば、チョーサーとシェイクスピアは各々愛と死の詩人となり、ミルトンは神の詩人であり、ワーズワスは当然自然の詩人となる。」確かに、「自然」は重要なキーワードである。しかし、興味深いことに、恋愛が主題でない『序曲』において、最終巻13巻の一節に、「この世の悲しみに調子を合わせながらも、全体として愛に焦点を合わせた」と謳い、その上、人間の感情を表す語‘love’という語の頻度は‘nature’を上回っている。本論文では、詩人が頻繁に使用した‘love’という語に焦点をあて、時代、文化、国境を超える人類共通のテーマである「愛」が、ワーズワス</p>	

にとって如何なるものなのか、あるいは‘love’の対象は何であるのかをテキストの精読により探求した。

第1章から第3章までの作業方法は、其々の品詞の‘love’（名詞121例、動詞62例、形容詞27例）の内容がとれる範囲をプリントアウトして精読する、次に、品詞別に統語的  
分類をした表を作成するというものであった。

第1章は、上記の方法により調査した名詞‘love’の統語的振る舞いの結果を記述した。  
‘love’のみでの使用が2回だけであったのとは対照的に、並列(juxtaposition)して使われる例が約4割を占めた。最も数の多いものは、形容詞プラス名詞の5つの並列であった。次に‘love’直前の前置修飾語を見てみる。全体の半数以上が前置修飾語を伴っている。中でも、British National Corpusの100位内に入らない、すなわち、loveとの結びつきの頻度が高くないとされる形容詞、とりわけ、‘higher love’(13.161)や‘intellectual love’(13.161)はワーズワス特有の用語で、詩人の愛の概念の独自性を明示すると思われる。また、第11巻から最終巻13巻では‘love’と‘imagination’の共存がみられる。ワーズワスの‘imagination’と対になっている‘love’、これは詩人が‘higher love’や‘intellectual love’と呼んでいるものだが、学問からの知識や学識に価値を置くものではない。詩人の唱える愛の概念に達した人を形容詞プラス名詞の5つの並列語句を使い、female softness, little loves, delicate desires, mild interests, gentlest sympathies(13.208-210)と表現している。詩人の唱える愛の概念とは、女性的なやわらかさ、ささやかな愛、慎み深い願望、温和な興味、この上なくやさしい思いやりに溢れているといった、実に穏やかな性質のものだと考えられる。

前章の名詞の調査ではワーズワスの「愛の概念」が浮かびあがったが、第2章では、動詞‘love’(62例)の直後を観察することで詩人の「愛の対象」は何か、または誰であるかを明らかにした。なぜなら、動詞‘love’は圧倒的に他動詞として用いられ、「愛する」ことの対象となる目的語を取るからである。目的語の中でも、その主要語(head word)を拾い上げ、どのような名詞が多く使われ、どのような分布を成しているかを角川『類語国語辞典』を基に表を作成し、分布の傾向を観察した。ワーズワスの愛したものは、詩人が生まれ幼少年期を過ごした故郷湖水地方の「自然」に関する語彙項目が多かった。フランス滞在から絶望のうちに帰国した詩人を慰め、精神の均衡を保つ重りとして自信を回復させたのは、幼少期から師と仰いだ故国の「自然」だった。「自然に関係するもの」に加えて「人物」の項目の分布が多かったことから分かるように、この自叙伝的長編詩『序曲』の中で、ワーズワスは彼が愛した「人物」にも度々言及している。例えば、友人フレミングやグラマースクール時代の下宿先のタイソン夫人、妹ドロシーや妻メアリー、そして『抒情民謡集』を共著で刊行し、文学的影響を与え合った Samuel Taylor Coleridge(1772-1834)である。改めて、もう一度『序曲』の中で詩人の愛の対象を振り返ると、湖水地方の「自然」そして、上述の

「人物」であった。

第3章では、名詞、動詞と同じ方法で、love を語幹とする形容詞 *beloved, lovely, loving* 27 例を統語的に分類した表を作成する。形容詞の用法は、限定用法（名詞の修飾）と叙述用法（補語）に分けられる。限定用法の場合は次に来る名詞、叙述用法の場合はその主語を調べ、*beloved, lovely, loving* の対象となる名詞を調べた。そして第2章の動詞 ‘love’ で使用した角川『類語国語辞典』の枠組みを再度利用して分類し、現れた二つの特徴について考察した。一つは ‘region’ に関係した語が最も多かった。ワーズワスは彼の故郷に関連したすべての物を愛した。次に多かったのは 抽象的な上位語 ‘form’ という語で、すべて限定用法の ‘lovely’ と連結し、詩人は ‘lovely forms’ という語句で使用していた。文脈の精読による考察から、‘forms’ は 詩人の愛していた “natural objects” や ‘nature’ と同義だ、いやそれらを包含する「姿形（すがたかたち）」であると判断した。「人物」の項目では、タイソン夫人、ドロシー、コールリッジといった前章で上がった人物とほぼ同じだった。この章の終わりに appendix を設け、‘love’ という語の 3 つの品詞（名詞、動詞、形容詞）の『序曲』の 1 巻から 13 巻までの分布を示した。

第4章では、ワーズワスにとっての「愛」の反意語である「悲しみ」に焦点を当て、Duncan Wu の「悲しみが詩人ワーズワスを作った」と述べた陳述の正しさを検証した。前述したワーズワスの詩行、「この世の悲しみに調子を合わせながらも、全体として愛に焦点を合わせた」から、詩人にとって「憎しみ」ではなく「悲しみ」こそが「愛」と対立している語だと考えられる。「悲しみ」が顕著に現れた箇所に『序曲』の “Waiting for the Horses” エピソードがある。このエピソードと類似した詩行が、ワーズワスの若かりし時代の作品、「エスウェイトの流域（The Vale of Esthwaite）」（1787 年作、以下「エスウェイト」と略記する）の中に見られる。「エスウェイト」の表現と『序曲』の表現を比較しながら、詩人の精神が成長していった過程を考察した。「エスウェイト」では父の死に遭遇して悲しみにくれ、たたずんでいた場所が、『序曲』になると、その同じ場所でワーズワスの感傷的な心が能動的に対象を甘受する心に変化しているのである。言い換えれば、13 歳で体験した父親の死という原体験を蘇らせ、悲しみと向き合い、記憶を留め直すことによって悲しみや苦しみに意義を持たせたのであった。

第5章では、ワーズワスが自然とどのように関わっていたかをエコロジーの観点から考察した。第2章で取り上げた他動詞 ‘love’ の目的語のうち半数以上が「自然」に関係する語という結果となったことは、ワーズワスが自然を愛し、自然の詩人だと言われることを裏付けている。個々の人間の精神と行動に焦点をあてる人文学では 1990 年以降、文学とエコロジーの関係について論じられるようになった。ワーズワスの作品のなかでエコロジーの観点から研究されたものはいくつかある。『序曲』では第8巻「回顧—自然への愛から人間愛へ」が取り上げられている。この章では主に自叙伝的な長編詩『序曲』全体を通して、自然を愛

でたワーズワスと自然との交流の軌跡を辿った。作品に現れた、自然の両義性や、人間愛へと繋がっている自然への畏怖と愛を味わうことは、私たちを取り巻く自然環境と私たちとの関係を見直す手掛かりとなっている。ワーズワスの時代にエコロジーという語は存在しなかったが、現代の私たちが『序曲』におけるワーズワスと自然との関係をエコロジーの観点から読むと、産業革命以来主流となっている人類の進歩、発展という大義を意識して識別し、自然にたいする畏怖の念を深く意識せざるを得ない。『序曲』は環境と人間の関係を今一度考えなおす糸口を提供しているのである。

最後に、ワーズワスの 'love' について一文でまとめるなら、*His love is as deep and profound as his despondency he had experienced throughout his life.* (彼の愛は生涯で経験した悲しみと同じくらい深くて深淵なものであった) となる。

### 論文審査の要旨

ウィリアム・ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の詩作品の思想面での研究は従来数多く行われてきたが、言語面での研究はあまり行われていないと言われている。そこで、学位申請者は、語学的な観点から、詩人の代表作である長編詩『序曲』に現れる 'love' について研究した。ワーズワスは自然詩人と称される事が多い。それ故、'nature' と 'love' という語の出現度数を比べると、前者のほうが多いと思われるが、実は後者のほうが多く現れている事を指摘している。詩人自身も、最終巻 13 巻で「この世の悲しみに調子を合わせながらも、全体として愛に焦点を合わせた」と謳っている。そこで、申請者は、ワーズワスの 'love' の概念とはいかなるものであるかを 'love' の周辺の統語構造を調べるという語学的な手法によって、探求しようとしたのである。

具体的には、『序曲』に現れた 'love' の名詞 (121)、動詞 (62)、形容詞 (27) の用例の、それぞれの内容が理解できる範囲をプリントアウトして、合計 210 の文脈を精読・精査した。続いて、それぞれの統語的振る舞いを記述する表を作成した。

第1章では、名詞の用法を調査している。'love' のみでの使用はただの2回で、並列して使われている例が 121 例中 48 例あり、約 4 割を占めた。全体の半数以上が前置修飾語を伴っている。その中でも目立つ語結合は 'higher love' (13 巻.161 行) と 'intellectual love' (13.161) である。これらは、ワーズワス特有の用語で、詩人の愛の概念の独自性を明示するものであるという。5 重の並列語句を並べて、詩人の唱える愛を表現している箇所、'female softness, little loves, delicate desires, [m]ild interests, gentlest sympathies (13.208-210)' 「女性的なやわらかさ、ささやかな愛、慎み深い願望、温和な興味、この上なくやさしい思いやり」を引き合いに出して、詩人の理想とす

る「愛」は、このような実に穏やかな性質のものだと考えられると結んでいる。

第2章で、動詞‘love’がどのような目的語を従えているかを精査した。詩人の愛の対象を知るためである。目的語の主要語を拾い上げ、どのような名詞が多く使われ、どのような分布をなしているかを調べた。その際、角川『類語国語辞典』の分類方法を利用した。ワーズワスの愛したものは、詩人が生まれ、幼少期を過ごした故郷湖水地方の「自然」に関する語彙項目が多かった。また「人物」の分類に入る語が多かった。

第3章で扱ったのは、loveを語幹に持つ形容詞(loved, loving, beloved)である。第2章同様に『類語新辞典』の枠組みを用いて分類した。2つの特長について触れている。1つは、形容詞が修飾するものは「自然」がよって立つ‘region’に関する語が多かったこと。もう1つは、その「地域」にある自然物の意味成分を構成する1要素、‘forms’の多用、それも‘forms’が‘lovely’と結びついて使用されているという指摘であった。

第4章では、ワーズワスにとっての「愛」の反意語である「悲しみ」に焦点を当てて、Duncan Wuが主張する「悲しみが詩人ワーズワスを作った」という陳述の正しさを検証した。悲しみが顕著に現れた詩行、『序曲』の“waiting for the horses”エピソード(1805)と詩人の若かりし時代の作品“The Vale of Esthwaite”(1789)の表現を比較しながら詩人の精神が成長して行く過程を考察した。秀逸な文体比較がなされている。

第5章は、自叙伝的長編詩『序曲』全体を通して、自然を愛でたワーズワスと自然との交流の軌跡をエコロジーの観点からたどろうとするものである。作品に表現された自然の両義性や、人間愛へと繋がっている自然への畏怖と愛を味わうことは、人間を取り巻く自然環境と私たちとの関係を見直す手がかりとなっているという。

最後に、『序曲』におけるワーズワスの「愛」は次のようにまとめられよう。

His love is as deep and profound as his despondency he had experienced throughout his life. (彼の愛は生涯に体験した悲しみと同じくらい深くて深遠なものである)

本論文は、印象主義読みではなくて語学的・文体的な読みにもとづいた論考としてこれまでには見られない知見を提示していて有意義であり、今後の研究も期待できることから、博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断できる。